第28回 寛仁親王牌・世界選手権記念 ―― 出場選手インタビュー ――

山田 英明 佐賀/89期 ここで結果を

今年はビッグ優出がないが、共同通信社杯でダービー以来の予選突破を果たし、徐々に手応えを感じている。

「共同（通信社杯）で、やっと今年2回目の準決に乗れて、自分の中で戦えるレベルが分かりました。ハンドルを変えたり、サドルを変えたりしていたのが、最近になって噛み合ってきた感じもあります。迷いなく走れているので充実していますね」

上昇ムードで迎える今回は、全プロのケイリン優勝で権利を得た、日競選理事長杯からスタートする。

「理事長杯はデカいですね。オールスター、共同（通信社杯）とありましたけど、気持ちは（理事長杯が）決まった時から、ここに向いていました。調子は上がっているので、しっかり気を引き締めて仕上げていきたいです」

照準を合わせた今シリーズで、山田が大暴れする。

横山 尚則 茨城/100期 できる限りの準備を

今年前半戦は精彩を欠いた。追い打ちをかけるように6月小田原で落車も、今期に入って徐々に復調している。

「前半は悪くて、（S級）1班の点数も取れなかったんですが、少しずつ良くなってます。106点まで戻ってきたけど、まだまだですね。弱いんで、とにかく練習するしかないと思ってます」

5月松山全プロではスプリントを初制覇。寛仁親王牌は初日の理事長杯の出走権利を手に入れた。

「乗れるチャンスの少ない大きなレースなんで、うれしいです。正直、勝ちにいって勝てるレベルのレースじゃないことは分かってます。開催を迎えるまでの過程が大事。しっかり準備します」

直前の9月向日町記念では落車。腰部打撲により最終日を欠場したが、本番までに立て直す時間はある。

南 潤 和歌山/111期 試行錯誤を重ねて

9月向日町記念はまさかの一次予選敗退。ここ数カ月は本来のパフォーマンスを発揮できていない。

「脇本（雄太）さんの影響で、グループの練習がトップスピードを上げることに重点を置いた内容に変わりました。確かにトップスピードは上がっているんですが、逆に持久力は落ちている感じがします。（9月の）共同通信社杯、向日町記念を走って、そう感じたので、これからは長くもがけるような練習を意識してやっていきます。とにかく自転車に乗る時間を増やします」

5月松山全プロは1㎞ TT を連覇。寛仁親王牌は2年連続で初日理事長杯からスタートできる。

「去年の理事長杯は5着までに入れなかったし、今年はしっかり5着以内に入って、準決勝を確定させたい」

試行錯誤を続ける南がひと回り成長した姿を見せる。

蕗澤鴻太郎 群馬/111期 先行策でアピールを誓う

一昨年7月にデビューし、今期からS級の舞台に立った蕗澤が、地元で開催される今大会でG1に初参戦。全プロ競技大会の1㎞TTで3位と結果を出して、出場権を獲得した。

「楽しみな気持ちと不安がありますけど、やっぱり不安が大きいですね。でも、勉強になることばかりだと思うので、何かつかんで帰りたいです」

在校中から徹底先行を貫き、在校成績は最下位。しかし、その強い信念こそが、この舞台に立つための一番の近道だったのかもしれない。

「自分のレースをするだけです。しっかり前に出て、逃げる。それだけ。パワー不足を感じているので、ここまでに少しでも重たいギアにも慣れておきたいです」

持ち味の先行で地元ファンにアピールしよう。

長尾 拳太 岐阜/103期 ベストの状態でＧ１へ

5月松山の全プロ競技大会の4㎞チームパーシュートで、G1初出場の権利をつかみ取った。

「選手になったからには、G1に出てしっかり走れる選手になりたいっていう思いがある。全プロ競技の結果で出られる寛仁親王牌が、今の自分にとっては一番出られる可能性があるのかなと」

13 年7月のデビューから6年。S級にステージを移した15年からも地道に力をつけてきた。

「大きいところに出られるっていうのはモチベーションも上がる。（前回から日にちが）空いてるんで、しっかりG1に向けてやればベストの状態で走れると思う。自分の力を出して、（シリーズの） 4日間、何もしないで終わったってならないように」

ゆとりのローテーションで状態面での不安はない。

島川 将貴 徳島/109期 考え過ぎず、シンプルに

これまでビッグレースでは散々に打ちのめされてきた。二次予選に勝ち上がった3月ウィナーズカップも一次予選で落車、失格があってのもの。「今までが全然戦えてないので、不安でしかない」と初のG1出場を前に島川は素直な心境を口にする。

「苦い思い出があるので、参加するまでは不安ですね。でも最近は練習の状態がいい。最高の状態で行ければ、そこそこやれるとは思ってます」

直前にギックリ腰になり欠場も考えた7月名古屋で優勝。ケアの重要性を知ってから成績が上向いてきた。「体も気持ちも楽になった」と、モヤモヤが続いた今年前半とは明らかに気配が違う。「G1だから力勝負ができれば」。考え過ぎず、シンプルに攻めのレースをするだけだ。

藤根 俊貴 岩手/113期 練習をみっちり積んで

初ビッグの共同通信社杯が8⑥⑨着。青森記念では将史、響平の新山兄弟ワンツーに大きく貢献したが、直後の共同通信社杯は最終日まで残れなかった。

「青森もそんなに良くない状態だった。だから、共同通信社杯も…。それまでは力でどうにかなってたけど、脚力もだし気持ちのもっていき方とかも必要だなと感じた」

共同通信社杯の尾を引くことなく、リセットする。

「7、8月の良かったころに、まだ戻ってない。その時は体が自然に動いていた。そこに戻せるように練習を頑張っている。自分的には期間が空いてしっかり練習した次の開催は、いいパフォーマンスが出せるんです。まず初日から気持ちをマックスに」

前回の共同通信社杯から間隔が空いて、3週間以上を練習に充てた藤根に変わり身が期待できる。

小林 泰正 群馬/113期 師匠との地元Ｇ１

「地元でしかもG1ですからね。それに師匠と一緒っていうのも、よりいっそう力が入る」

初のG1の大舞台。頼れる師匠であり、産声を上げた時から自分を知る叔父の小林潤二との地元シリーズに、小林は目を輝かせる。

S級特進2場所目、初の記念となった7月弥彦でいきなり優出を果たすと、続く西武園記念でも決勝にコマを進め順風満帆だった。が、西武園記念決勝で落車に見舞われ、復帰場所の福井準決でも落車が小林を襲った。

「弥彦ではあんまり周りに警戒されてなかったのもあると思うけど。西武園は冷静に走れたし、決勝に乗れたのは自信になった。福井の落車で2週間近く休んでいた。まだ戻り切ってはないけど、日にちもある。松戸（千葉記念）でレース感覚を戻して、地元に備えたい」